



# 支えは力になる

## 【特集】女性の「選択」をサポート

「ずっと働きたい」「私の得意なことが誰かの役に立てば」「あったらいいの」と思うものを自分で作れたら」。そんな思いを持つ女性はたくさんいますが、家事や育児に追われていたり、自信が持てなかったり、実現はなかなか難しい場合があります。

しかし、家族や友人、地域や職場、市の制度など多くの「支え」が大きな「力」となって、思いを実現させようとしている人もいます。さまざまな支えが、女性の暮らし方や働き方、活動の「選択肢」を多様にしています。

### 【本特集を通して】

#### （広報課）

最初は、女性が市の多様な支援策を活用して、いろんな形で活躍していることを伝えようと思って編集を進めていました。しかし、取材をしていくうちに、活躍の背景には、身近な人などの多くの支えがあることに気が付きました。

支えてくれる人たちへの感謝と、今度は自分が支える側になりたいという気持ちが伝わってきました。

## 自分で選択できるように

### あらゆる分野に女性の力

女性のライフスタイルは、結婚、出産、育児介護などによって、自分が選択する・しないに関わらず、大きく変化することが少なくありません。しかし、ライフスタイルがさまざまだからこそ、同じ立場の人の気持ちを理解できたり、生活や仕事、地域活動をする上で新しい発想を生んだりできるのだと思います。女性が日常生活で培ってきた経験は、家庭だけでなく、あらゆる分野で生かせる大きな強みです。

### 女性が活躍できる環境づくりを

しかし、女性本人が頑張るだけでは、男女があらゆる分野で活躍できる社会は実現できません。慣習や意識、制度などを社会全体で変えていく必要があります。

国が平成28年4月に施行した女性活躍推進法（女性の職業生活における活躍の推進に関する法律）はその一つ

です。事業主に対し、女性の採用・管理職比率や勤続年数男女差、労働時間の状況などを把握し、採用・登用や教育訓練、継続就業、職場風土の改革などについての数値目標や取組内容を定める行動計画を策定することが義務づけられました。

市では、「摂津市男女共同参画計画（ウィズプラン）」を策定し、男女共同参画センターをはじめ市の各部署で計画に基づく施策を展開しています。女性の人材育成・キャリアアップ・再就職・創業支援などの講座や相談、NPOや市民活動団体との協働事業の実施、子育て・介護サービスの充実など多岐にわたっています。

それぞれの事情があっても、望む暮らし方や働き方、活動などを女性自らが選択し実現できるよう支援に取り組んでいます。



### 支援がまちを発展させる

今回の特集で紹介された人は、家族や友人・ご近所など身近な人の支えと市の多様な支援策の活用によって、さまざまな活動に取り組んでいます。

男女共同参画センター「ウィズせつ」でも、女性の活躍を支援する事業を展開し、利用者が活躍・飛躍するきっかけをつくって実を結んでいます。また、摂津市役所は課を超えてうまく連携し取り組んでいる事業もあります。市がいろんな形で支援することが、まちの発展にもつながると思います。

### 変わる保育所の役割

子育て中の人を支える一つに保育所がありますが、私が子育てしているときには、子

どもを保育所に預けることに対して、周囲から「かわいそう」などと言われることがありました。今でも、子どもを預けて仕事することに罪悪感のようなものを感じる人がいるのではないのでしょうか。

時代とともに保育所・保育士の専門性は多様で高度になってきています。入所だけでなく、子育て支援の場としても安心して利用してほしいです。

### 「自分の幸せ」を選ぶ

どんな世代の人でも、いつでも輝くことができると思います。そのためには法律制度や支援など自分の権利を知り、多様な選択肢の中から自分の幸せを選んでほしいです。しっかりと考えて自分で選んだら、どんな生き方でも満足度が高まると思います。

また、社会の中でいろんな人と関わりと楽しいこと、話す場があると人生が豊かになることを今回紹介された人たちから感じ取ってほしいと思います。

大阪女子短期大学学長・市立男女共同参画センター運営委員会委員 星野智子さん



NPO 法人摂津まるとプロジェクト・理事長 **新田昌恵さん**

子どもたちに  
自分のまちを誇りに思ってもらいたい



子連れで楽しめる習い事サークル「マミー・クリスタル」や、子育て支援と地域活性化イベント「摂津まるとマーケット」などを主催。さらに、地域に事業を生み出そうとNPO法人を設立し、理事長を務めています。

**ママたちの希望をつなぐ**

新田さんが摂津市に引っ越してきたのは、平成22年12月、5歳と4歳の娘の育児に追われていたとき。子連れで楽しむ習い事サークル「マミー・クリスタル」を立ち上げたのは翌年5月でした。始まりは、子ども連れでママが楽しめるところが欲しいと思い、インターネットで「摂津のママ集まれ」と呼びかけたこと。実際に会って話すと、いろんな習い事をしたという声が多く、中には人に教えられない趣味や特技を持つ人もいたことから、両者をうまくつなぎたいと考えたそうです。「ママ友ではなく、私自身の友達が欲しかった。東日本大震災が起こって、人のつながりが大切と感じたこともきっかけでした」

サークルを続けていく中で、市にはハンドメイドが得意な人が多く、自分たちの力でイベントがしたいという話が出てきたことから、さっそく市のコミュニティプラザにある市民活動支援課に相談。ちようど市民公益活動を支援する補助金制度がスタートすることになり、迷わず申請したと言います。「ゴール

今年、第5回を迎える「摂津まるとマーケット」は9月10日(日)にコミュニティプラザで開催



が先にあって、人手と資金は後から考えたんです。支援があったから実現できました」と笑う新田さん。プレゼン審査を経て補助金を受け、平成25年9月、「摂津まるとマーケット」を開催しました。

**摂津の魅力をつくりたい**

しかし、3年目には参加者が5千人規模になる反面、運営者はわずか数人となり、開催の危機を迎えます。「でも、毎年楽しみだとか、摂津ってすごいという声を聞き、辞めるより続ける方法を考えていることにしま

した」

そこで、平成28年8月に「NPO法人摂津まるとプロジェクト」を設立。地域活性化を行う人材の発掘と育成、地域情報の発信などを始めました。「さまざまな立場の人が関われるNPOには、協力や応援がとても重要。だから人との縁をつなげていきたい」と語ります。また、「子どもたちに自分の住むまちの魅力を知って誇りに思ってもらいたい」とも。

**思いを話すことで理解を**

「家族からは、もう辞めたらと言われたことも。だから、とにかく私の思いを具体的に何度も話しました」。NPO法人設立の頃には、新田さんの覚悟を理解し、家族会議でママを支えることが決定。家事やイベント運営を手伝ってくれるようになりました。「夫は会社と家との往復でしたが、仕事でしか生かせていなかった力を地域で発揮しています。今はおもしろがっているくらい」と家族一緒に活動を楽しんでいます。

つどい場「輪」代表 **中村尚子さん**

つどい場をすることで  
メンバーも元気をもらっています



市のせつつ女性大学を修了後、同大学修了生らと、集って話して生きがいや仲間づくりなどが行える、つどい場を始めました。また、「笑いヨガ」や「認知症予防ゲーム」の出前講座を開催するなど、活動の幅を広げています。

**始まりはおしゃべりから**

中村さんは、平成22年度の「せつつ女性大学(現ウィズせつつかレッジ)」の修了生です。同大学は、社会や地域で活躍できる女性の人材育成を目的に開催している市の男女共同参画センターの講座。当時は課題で個別発表があり、「ほとんどの人は人前で発表する経験がそれまで全然なくて、みんな手が震えていました」と話します。

大学修了後、「もつと、このメンバーと一緒にいたい」と、みんなで月一回の「おしゃべり会」を開催。そこで出た知りたいうことを企画し、同センターと協働で講座を運営するチャレンジ企画事業に応募し、プレゼン審査を経て企画が選ばれ、「人とつながるつどい場づくり」地域と介護と医療」の講座を実現させました。

そして、同講座の修了生有志が加わり、おしゃべりの力で元気になり、人をつなげられる場所をつくらうと、平成25年に「つどい場・輪」を結成しました。

**「つどい場」の活動**

平成25年には当時新設された

「つどい場」毎週水曜日午前10時〜12時に第41集会所で開催



市の市民公益活動補助金制度に応募。公開でのプレゼン審査もあり緊張の中の発表だったそうですが、見事に補助金を獲得しました。その後も制度に応募し、映画会や医療講座とおしゃべりの場、会食会、出張つどい場などを実現させました。27年度には、府営住宅集会所でつどい場を始め、今の第41集会所のつどい場開催につながったそうです。また、つどい場で実施している「笑いヨガ」や、「認知症予防ゲーム」が、市の出前講座に登録されました。

「とにかくやってみようという前向きさがあります。一人

は自信がなくてできないことも、メンバー一人ひとりの力が合わさると実現できるんです」メンバーの中には、自主的にさまざまな活動をしている人も多く、ボランティアや地域活動に参加する人や、自宅の一室でつどい場を始めた人もいます。

「つどい場での活動が広がったり、外で学んだことをこちらで実践したりと、相乗効果を生んでいます」

**ナチュラル＆ポジティブ**

中村さんは最後に「つどい場に参加した人が、元気になって帰っていくのを見ると、とてもうれしくなります。活動はだんだん知られてきましたが、まだ成長中で、メンバーからはつどい場・輪の名前がひとり歩きしているとの声もあります。大学修了後に集まった際に付けたグループ名「ナチュラル＆ポジティブ」の名前のおとりの、自然体で自分のできることを持ち寄りながら、新しいことにチャレンジしてきました。私たちが元気になったこのような活動が、摂津のまちに広がっていくといいですね」と話しました。



山口志乃さん  
ハンドメイド雑貨「こんぶ工房\*」

父親の会社の空きスペースで雑貨の制作を始め、ガラスアートやプラバンブローチ、粘土雑貨などを同スペースとインターネット上で販売しています。昨年度は、市の創業支援セミナーを受け、男女共同参画センターのフェスタにも参加しました。



いろいろな人とつながりが持てる  
自分のお店を持ちたい

スタートは  
会社の空きスペースから

山口さんがハンドメイド雑貨の販売を始めたのは、約2年前から。本業として実家の会社の手伝いをしていましたが、空いている時間とスペースを使って何かできないかと考え、趣味で作っていた雑貨の販売を始めました。

さらに、同スペースに近所の小学生を招いてのガラス彫刻体験会の実施や、市の男女共同参画センターが主催するウィズセツフェスタに参加するなど、さまざまなことにも挑戦しています。

しかし、元々引っ込み思案な性格だったという山口さん。転機になったのは学生時代、当時、一人でいろいろと抱え込みがちになり、精神的につらかった時期があったそうです。その時、友達から心配や励ましのメッセージがたくさん届きました。

「自分の周りには、こんなに多くの人がいてくれたのかと気付きました。人とのつながりが大切にしていこうと思いました」  
フェスタへの参加も、会社の

前をよく通る近所の人が教えてくれたことがきっかけ。わざわざ応募用紙を持ってきてくれたそうです。その後、フェスタ参加の条件となっている創業支援セミナーを受講。「講師や参加者のいろんな話を聞き、勉強になりました。自分の目標もみんなの前で発表できました」。こうして、フェスタの「手づくりマルシェ」への初参加が実現しました。

お守りになる

山口さんは、ハンドメイドの技術を生かし、「子ども車いすマーク」を作成し、普及にも取り組んでいます。

病気などで歩行が困難な子どもを、ベビーカーに乗せていると、「(シヨッピングセンターな



▶子ども車いすマークのストラップ

どで)ベビーカーをたたみなさい」「大きいのだから歩かせなさい」「邪魔になる」などと言われてしまい、悩んでいる人が多いそうです。マーク作成のきっかけは、そんな状況にあった友達からの相談でした。マークを作って、友達に渡すと、それを見た他のお母さんからも作成を依頼されるようになったそうです。

そんな中、「お守りになる」と言ってくれたのが印象に残っているとのこと。私にも精神的につらいとき、病院で知らない女性にアメをもらい、お守りになると思った。自分が作ったものが誰かのお守りになっていると思うと、とてもうれしい」と話します。

「一人じゃない」と  
思える店を持ちたい

山口さんの将来の夢は、自分のお店を持つこと。

「私もそうでしたが、悩むと自分は一人なんだと思いがちになってしまいます。気軽に来て、一人じゃないって、思えるようなお店を持ちたいです。いろいろな人とつながりを持って、お茶していただきたいですね」。

宮内三奈さん  
(三人の息子の子育て中) 美容師



「夢を諦めないで」

「美容師は小学1年生からの夢。家の前にあった美容室のきれいなお姉さんに憧れて」と話す宮内さんは、3人の子どもを育てながら自宅の1階で美容室を経営しています。

結婚を機に美容師の仕事に辞めていましたが、一人目の子どもを出産した後に自分のお店を開業しました。子育てとの両立やお店の維持はとても大変ですが、「結婚することでも夢を諦めてほしくない」という夫の言葉が後押しになったと言います。また、「近くの保育所が午前7時から午後7時まで開所していたことも助かりました」と当時を振り返ります。今は大きくなった子どもたちも働くことに理解と協力をしてくれる頼もしい存在です。

悩んだら進んで相談

「長男は生まれつき心臓が悪く、幼い頃、数回手術をしました。そのため、仕事を続けていけるか不安に思う事もありました」

そこで、保育所や市役所などに相談。保育所での支援策や福祉制度などを教わりました。「悩んだときは、自分から進んで相談に行くことが、楽しく安心して子育てできる秘訣」と言います。「これから市役所などの制度を、いい意味でうまく活用し、やりたい仕事を続けていきたいです」

お客様の支えに

「お店では、お客様からいろんな意見を聞くことができて、自分の悩みが解決することもあります。私にとって働くことは、子育てを充実させるための手段でもあるので、うまくバランスが取れています」と話す宮内さん。「誰にでも、人には悩みがあります。私がお客様に支えられているように、私もお客様を支えられる美容師になりたい」と目標を語りました。

井上知美さん  
(二人目を出産して育休中) 幼稚園教諭



ずっと続けたい仕事

今の仕事は井上さんにとって、小学生からの夢でした。

「弟の幼稚園の先生を見て憧れました。いつもはわがママを言う弟が、先生の前では言う事を聞いて、褒めてもらおうとがんばっていました。それを見てすごい」と

子どもができて、仕事を辞める気持ちは全くありませんでした。現在、二人目を出産して育休を取得中ですが、終わればまた元の職場に復帰するそうです。

困るのは子どもの病気

仕事と子育てを両立する上で、一番困るのは子どもが体調を崩したときです。

「職場の人たちは、ありがたいことに休んで看病してあげてと言ってくれます。でも、自分

自分の子は全然違う

市の地域子育て支援センターの親子ひろばに参加したのは、最初の子ができた際に、市の赤ちゃん訪問を受け、助産師さんに教えてもらってから。

「幼稚園で子どもを相手にしているが、自分の子どもとは全然違います。まず幼稚園は3歳からですし、24時間相手をするわけでもない。感情的にもなりやすい。また最初の4カ月くらいは夜泣きもひどくて大変でした」

現在、平日は近所のこども園の広場に、「めちゃくちや参加している」と言います。

ひろばに参加してから、同じ月齢の子を持つお母さんの友達もできました。

「成長のことや食事のことなど、相談したり、悩みを聞いてくれたりするので、とても助かります。子どもが大きくなって、お付き合いはずっと続いているんですよ」



